様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００６０４

研究課題名（和文）ザンジバルにおけるスワヒリ語諸変種の関係を探るための挑戦―語彙と文法に着目して―

研究課題名（英文）A Challenge to Explore the Relationships among Swahili Varieties in Zanzibar: Focusing on Lexicon and Grammar

研究代表者
竹村　景子（Takemura, Keiko）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・教授

研究者番号：２０２５２７３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：コロナ禍により2年間も調査地に赴くことができず、新データの収集および過去のデータの検証ができない状況に陥ってしまったため、当初の目標を達成できたとは言い難い。ただ、オンラインも含む国際学会等での発表、既に収集したデータを用いての論文・研究ノートの執筆を行い、研究内容を深化させることはできた。
ザンジバル島とペンバ島のスワヒリ語諸変種の分布図作成までには至らなかったが、時制表現をはじめとしていくつかの文法事項については地図上でその違いが一見してわかるようにするなど、本研究の成果を公表する方法に工夫を凝らした。これは、バントゥ諸語のマイクロ・バリエーション研究にも資するものになると思われる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
旧来のスワヒリ語諸変種の分類では、ザンジバル島に3つの大変種、ペンバ島には2つの大変種があるというのが一般的であり、さらに細かく各村落部の変種を記述する試みはほとんどなかった。本研究においては、それぞれの島のいくつかの村落部においてそこで話される変種の基礎文法と基礎語彙を収集しており、そのデータを比較してみると、ごく近隣の村でも異なる文法事項や語彙が存在していることが明らかとなった。このことにより、「スワヒリ語」として一括りにされている言語の重層性の一端が見えるようになり、また、バントゥ諸語全体のマイクロ・バリエーション研究にも資するデータを提示することができたと言える。

研究成果の概要（英文）：Since the corona disaster prevented us from visiting the research site for two years, we were unable to collect new data and verify past data, so it is difficult to say that we achieved our initial goals. However, we were able to deepen our research by presenting our findings at international conferences, including online, and by writing papers and research notes using the data we had already collected.
Although we were not able to map the distribution of Swahili varieties on Zanzibar and Pemba islands, we did devise ways to publicize the results of this research, such as making the differences in tense expressions and some other grammatical items visible on the map. This will contribute to the study of micro-variations in the Bantu languages.

研究分野：スワヒリ語学・文学・文化論

キーワード：スワヒリ語諸変種　マイクロ・バリエーション　基礎語彙　基礎文法　バントゥ諸語　ザンジバル島　ペンバ島

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

アフリカ大陸には約 2,000 言語（Grimes, B. F. (ed.) 1996. *Ethnologue: Languages of the World*, 13th edition. Dallas: Summer Institute of Linguistics and University of Texas at Arligton によれば、2,035 言語）が存在すると言われている。欧米を中心にこれら言語の記述研究が進められてきた結果、アフリカ大陸固有の言語群の分類方法も定着しつつある。日本のアフリカ諸語研究の蓄積は残念ながら欧米から半世紀以上遅れていると言われてきたが、それでも、これまでにも優れた記述言語学的研究がなされてきた（Bantu Linguistics Series(ILCAA)等参照)。ただ、それらの研究では、現在「危機言語」と称される少数民族の言語、それも欧米などでの先行研究のほとんどない言語を対象とすることが多かった。

本研究の対象であるスワヒリ語は、上述の「危機言語」とはほど遠い存在と認識されている。古くは 19 世紀初頭にヨーロッパ人宣教師による記述が試みられ、東アフリカにおいては最も早く（1930 年）標準語と正書法が確立された言語である。植民地期以前から植民地期を通じてヨーロッパ人宣教師、入植者、そして言語学者たちによる調査研究が行なわれており、おそらくその蓄積はアフリカ諸語の中で群を抜いている。欧米やアジアにおいてスワヒリ語を教授する教育機関が少なからず存在し、「アフリカの言語と言えばスワヒリ語」という認識が広まっていることも事実であり、スワヒリ語と他言語の辞書編纂がなされ、各言語による「スワヒリ語文法書」もあまた出版されている。このような背景から、「すでに研究し尽くされた」言語であるとの認識が広がっていると言っても過言ではない。

しかしながらスワヒリ語研究者の宮本は、「バントゥ諸言語のなかで最も話し手人口が多く、研究が最も進んでいると見られるスワヒリ語の場合に限っても、その歴史はほとんど解明されていない。アフリカ史研究叢書の一冊として刊行された W. H. Whiteley（1969）は、「言語と文学」「初期の歴史」「内陸への拡大」「植民地期」「『標準』スワヒリ語」「独立後」「国語の諸問題」と題する 7 編の論文で構成されているが、これを見てもわかるとおり、著者の関心は、言語の内的機構と構造（音韻・文法・語彙）の変化を明らかにするのではなく、むしろ、スワヒリ語の生態、社会史ともいうべきものの究明に注がれている」（宮本正興.『スワヒリ文学の風土―東アフリカ海岸地方の言語文化誌』. 2009. 第三書館. p.290）と述べ、「スワヒリ語とスワヒリ文学の歴史を明らかにするためには、言語史と社会史の両面からの均衡のとれたアプローチが必要である。…中略…筆者の見解によれば、スワヒリ語に関して言語史と社会史からの両面アプローチの第一歩として、方言の考察と方言区画の設定が緊急である」（同掲書, p.290）と指摘している。

研究代表者は、東アフリカ海岸地域（スワヒリ地域）での調査を十数回にわたって行なってきた。調査内容は記述言語学的、社会言語学的、社会学的なものに大別できるが、いずれの調査においても現地の人々が日常用いるスワヒリ語を聞き取ることから始めた結果、いわゆる「標準スワヒリ語」と彼らの母語である様々なスワヒリ語変種との間に、文法的にも語彙的にも大きな隔たりがあることを確認できた（竹村景子. 1997.「スワヒリ語チャアニ方言について―音韻と時制を中心に―」『スワヒリ＆アフリカ研究』第 9 号. pp.118-129. 大阪外国語大学.，竹村景子. 2002.「一つの言語とは何か―ザンジバル島における「方言」と「標準語」の間―」『現代アフリカの社会変動―ことばと文化の動態観察』（宮本正興・松田素二編）. pp.194-219. 人文書院）。同時に、日本の「方言の変容」状況と同様、スワヒリ語諸変種にも明らかに標準語からの影響と見られる変容が起こっており、老年層と若年層の用いる話体には明らかな差異が存在することも確認した。「標準語」の使用が拡大する一方であることから、今後、この変容が進行し、諸変種の継承そのものが危ぶまれる事態になると考えられることから、スワヒリ語の「標準語」を除く諸変種は「危機言語」であると認識され得る。しかし、これら様々な変種についての記述研究は、日本だけでなく広く欧米を見渡した場合でも、わずかに Whiteley の *KI-MTANG'ATA: A Dialect of the Mrima Coast - Tanganyika*. East African Swahili Committee, Makerere College, KAMPALA, 1956 および *The Dialects and Verse of Pemba - An Introduction*. East African Swahili Committee, Makerere College, KAMPALA, 1958 などが存在するのみであり、それらも「文法スケッチ」にとどまっている。包括的な文法記述と語彙収集はできていないのが現状である。一方、研究代表者はすでに以前の調査において、先行研究では同じ「トゥンバトゥ方言」が話されるとされているザンジバル島北部県のチャアニ村とキベニ村で、いわゆる be 動詞表現に差異が見られ、逆に、南部県の「マクンドゥチ方言」が話されるとされているジャンビアーニ村ではチャアニ村とほぼ同様の表現が用いられることを確認した。

以上のことから、宮本が指摘したスワヒリ語研究において決定的に欠如している点、すなわち、できる限り多くの変種について「言語の内的機構と構造（音韻・文法・語彙）」に焦点を当てて徹底的な記述研究を行なうことが、日本におけるスワヒリ語研究にとって急務であるとの結論に至った。なお、多くの先行研究で「スワヒリ語の故地」と考えられているのはケニア共和国の北方海岸部であるため、そこでの調査は重要であると考えられるが、残念ながらケニアの政治状況等の関係で調査に赴くのは非常に危険であると判断した。また、タンザニア本土の海岸部での調査も急務であると考えられるが、これまでの研究代表者の調査研究からザンジバル（ザンジバル島およびペンバ島）だけでも先行研究における変種分類では極めて不十分であることが推測

されるため、本プロジェクトでは調査対象地域をザンジバルに絞った。

２．研究の目的

本研究では、スワヒリ語という言語の内的構造が「標準語」のみで研究されるべきではなく、数多くの変種が重層的且つ複合的に連関し合って存在する「方言連続体」であることを闡明し、先行研究（Stigand(1915)、Ingrams(1931)、Bryan(1959)、Polomé(1967)、Whiteley(1969)、Chiraghdin(1977)等）で試みられた方言区画の再確認を行なうため、ザンジバルで用いられる様々なスワヒリ語変種の文法、基礎語彙、音韻に関する詳細な記述調査を展開することを目指した。特に、過去時制表現といわゆる英語の be 動詞表現に当たるもの、また、関係接辞を用いた関係節について着目し、それら変種間の統語論的差異の分析、形態音韻論的差異の分析、音韻論上の異同を把握し、最終的な目標である「スワヒリ祖語」の再構築に向けた情報の蓄積を目指した。

スワヒリ語に関する研究蓄積は決して少なくないが、従来の研究の多くは「社会言語学」的な関心から東アフリカ諸国における「言語政策」や「多言語状況」と絡めた言及にとどまるものや、個別の文法的関心から「標準スワヒリ語」の例文を用いて「統語論的」「形態論的」に言及されたものである。本研究では各変種の徹底的な文法記述を行なうと同時に、一次資料として口承文芸やライフヒストリーの収集も目指した。これらを収集するのは、母語話者に自らの生い立ちや既知の昔話・民話等を語ってもらうことで、自然な発話に見られる諸変種の特徴をつぶさに観察することができると考えたからである。また、これらの一次資料は、世界のスワヒリ語学界において利用され得る膨大なデータとなることが期待された。さらに、欧米言語の文法規範からの分析ではなく、日本語を母語とする者が独自にスワヒリ語の文法を分析することで、欧米やアフリカの研究者に対して斬新で独創的な理論を提示することが可能となると考えられた。

３．研究の方法

研究代表者の竹村と研究協力者の宮﨑は、各対象地域においてスワヒリ語変種の文法記述にとって適当な調査地点を広く踏査し、その地域の変種の文法および基礎語彙を記述するためにふさわしいコンサルタントの獲得に努めた。コンサルタントとしては、できればその地点から移動した経験のない老年層の女性を獲得したいと考え、村長に依頼してそういった女性を紹介してもらった。同一の文法調査票および基礎語彙票を用いて、まずは当該変種のアウトラインを把握することを目指した。住み込みによる参与観察とインタビューを基本としたが、ダルエスサラーム大学やザンジバル国立大学で資料収集、調査研究を実施し、現地研究者との交流をはかった。さらに、スワヒリ地域の民俗文化に見られる同質性と異質性を明らかにするため、「民俗文化比較のための語彙調査票」を用いて、動植物関係の語彙に見られる「方言的種々性」を把握することも目指した。スワヒリ地域はインド洋文化圏の西端に当たり、インドネシアやマレーシア等と同様に「ココヤシ文化」を保有し、また、豊富な魚介類を誇る漁場でもあることから、これらの植生や海洋生物に関する語彙が人々の暮らしに深く根付いている。南北に細長いベルト地帯であるスワヒリ地域で、これらの語彙がどのように分布しているのかを詳細に記述することを目指した。

竹村は、主にタンザニア連合共和国のザンジバル島北部とペンバ島北部の村落部の変種を記述することに努めた。先行研究において「スワヒリ語諸変種」の中の「南方変種」と一括りに認識される両島の諸変種にどのような差異があるのかを明らかにする端緒とするため、ザンジバル島の北西に位置するトゥンバトゥ島、ザンジバル島北部地域一帯、およびペンバ島南部で話されるとされる「トゥンバトゥ変種（Kitumbatu）」が、それらの域内で「下位変種」を持つのか持たないのか、文法、音韻、語彙に差異はないのか等を詳しく見た。また、民俗文化比較のための語彙収集に力を入れた。

宮﨑は、ザンジバル島東部と南部のいくつかの村落におけるスワヒリ語変種の記述に努めた。先行研究ではこれらの地域で「ハディム変種（Kihadimu）」と呼ばれる変種が話されているとされるが、北部同様、それらの域内で「下位変種」が見られるかどうかを詳細に調査した。

最終年度の 2023 年度には、竹村と宮﨑が過年度分の調査で得た成果を持ち寄り、既調査地域のスワヒリ語諸変種がどのような関係性を持っているかについて比較検討を開始した。従来の先行研究で指摘された「スワヒリ語諸変種」の分布と合致するのかどうか、また、「下位変種」の存在が認められるかどうかについての議論を深めたと言える。

４．研究成果

2019 年度は、タンザニア連合共和国ザンジバル島およびペンバ島での調査を行った。過年度にも調査を行ったザンジバル島北部県北部 A 郡に位置するチャアニ村を拠点とし、いくつかの村に赴いて調査協力者の選定を行った。またペンバ島では北部のウェテ市を拠点とし、やはりいくつかの村の出身者に当たって調査協力者の選定を行った。これらのうち、数人には基礎語彙およびいくつかの文法項目についてパイロット調査を開始した。

文法事項に関しては、特に過去時制表現と受動態表現について例文収集を行った。未だ収集数が少ないため、分析は今後の課題であるが、地域差だけではなく年代差もあるのではないかという予測ができるようなデータも見られるため、研究期間内に詳細なデータ収集および分析を行えば、バントゥ諸語のマイクロ・バリエーション研究にも貢献できるのではないかと思われた。

語彙についても、本来は3000語の収集をすべきところ、調査許可申請および取得に相当の時間がかかったため、600語のみの収集にとどまった。年々、ザンジバルにおける調査許可取得にかかる時間と手間が増えているため、現地エージェントに依頼する等の方策を考える必要があると思われた。

なお、2019年度内の本研究に関連する研究成果としては、“Dialectal Variation in Swahili - Based on the Data Collected in Zanzibar”*Swahili Forum* 26: 45-59 (2020.3)（研究協力者の宮﨑と共著）と「スワヒリ語諸変種記述調査報告（3）―トゥンバトゥ―ゴマニ変種基礎語彙600語―」『スワヒリ＆アフリカ研究』31: 35-53（2020.3.25）の2本がある。

2020 年度はコロナ禍の影響によりタンザニア連合共和国におけるフィールドワークが全くできないままに終わった。昨年度からの継続でザンジバル島北部の「トゥンバトゥ―ゴマニ変種」の本格的な文法記述と基礎語彙3000語の収集、また、ペンバ島における「ミチェウェニ変種」の調査も本格化させる予定であったが、かなわなかった。本研究はフィールドワークによるスワヒリ語諸変種の記述ができなければ進展させることが非常に難しいため、新しい発見等は残念ながら皆無である。

しかしながら、日本アフリカ学会第57回学術大会（オンライン開催）において、宮﨑との共同発表「ザンジバルのスワヒリ語諸変種に見られるマイクロ・バリエーション」を行い、今後の研究に大変有益となるコメントを多数の参加者から得ることができた。特に、文法記述においては多くの例文を収集して提示した方が変種同士の差異を比較する場合によりわかりやすくなることや、地域変種の分布図を作成し始めておいた方がよいということなど、プレゼンテーションにおけるアドバイスが非常にありがたかった。

また、本研究のこれまでの成果も盛り込んだ論文を英語で 2 本執筆し（“Introduction - Dynamism in African Languages and Literature: Towards conceptualisation of African potentials”および“Swahili from the perspectives of 'Language' and 'Literature'”）、それら論文が収録された書籍（*Dynamisn in African Languages and Literature: Towards conceptualisation of African potentials*）を Francis B. Nyamnjoh 氏と共編著者として上梓することができた。

2021年度も2020年度に引き続き、コロナ禍の影響によりタンザニア連合共和国におけるフィールドワークが全くできないままに終わった。ザンジバル島北部の「トゥンバトゥーゴマニ変種」の本格的な文法記述と基礎語彙3000語の収集、また、ペンバ島における「ミチェウェニ変種」の調査も本格化させたいと願っていたが、かなわなかった。

しかしながら、宮﨑との共同発表“On the grammatical variation in 'Viswahili' in Zanzibar”を The 8th International Conference on Bantu Languages (University of Essex, UK) において2021年6月2日に行い、特に海外のスワヒリ語研究者から今後の研究に大変有益となるコメントを多数得ることができた。その発表を聴いたイギリスのスワヒリ語研究チームからは、現地調査における留意事項などについてのサジェスチョンを求められ、オンラインでのディスカッションを行った。

また、10月11日には「関西アフリカ言語研究会」を行い、上記の宮﨑との共同発表を日本語で行った。同研究会では、記述言語学、社会言語学の分野における最新の研究動向を学び、様々な情報交換を行うことができたので、非常に有意義であった。

スワヒリ語を広く日本社会に紹介する一助とするため、絵本翻訳にも携わった。宇都宮大学の阪本公美子氏、弘前大学の杉山祐子氏、東京外国語大学の坂井真紀子氏執筆の『ニョタのふしぎな音楽―タンザニアの星空の下で』のスワヒリ語訳を行い、日本とタンザニアとの関わりについて両国の子どもたちに伝えるプロジェクトに参加できた。

2022 年度は、3 年ぶりにタンザニア連合共和国に出張することができ、9 月 9 日～20 日の日程で調査を行った。ザンジバル島では北部県北部 A 郡のチャアニ村に赴き、2019 年度までもずっとコンサルタントを務めていただいた方に依頼し、「チャアニ変種」について従来の調査で聞き逃していた文法的疑問点をいくつか確認した。また、「トゥンバトゥ―ゴマニ変種」の民俗語彙収集のために、海洋生物の絵を用いて聞き取りを行った。ただ、今回もペンバ島における「ミチェウェニ変種」の調査を行う時間は確保できなかったため、次年度の課題とした。

研究の社会的還元としては、「「アフリカ文学」と言語問題―スワヒリ語作家サイド・アフメド・モハメドを中心に―」（@洪庵忌―適塾の夕べ―、2022 年 6 月 6 日）、「大阪大学外国語学部の「これまで」と「これから」」（@中之島アートエリア B1、21 世紀懐徳堂シリーズ vol.4「箕面キャンパスの挑戦～新たなキャンパスの在り方をめぐって～」、2022 年 6 月 30 日）、「ザンジバルの村での生活を通して見えたもの」（@第 4 回大阪大学サイバースポーツコンプレックス（CSC）シンポジウム基調講演、2022 年 8 月 10 日）、「大阪大学外国語学部の歩み（@在タンザニア日本国大使館、2022 年 9 月 18 日）、「周縁から見た世界～スワヒリ語とタンザニアでの経験を通して～」（@第 2 回箕面市姉妹都市交流フォーラム「姉妹都市交流がめざす世界の平和～私たち市民にできること～」、2022 年 11 月 27 日）、「周縁を学ぶことの面白さと魅力―スワヒリ語とアフリカ地域研究を通して―」（@国際教育講演会「真の国際人を育てるために教育現場ができること」一般社団法人「学びに SPARK を」主催、2023 年 2 月 13 日）という講演を行った。

2023 年度は、ザンジバル島およびペンバ島でのフィールドワークを行い、合計 3 名のコンサルタントに基礎語彙 600 語の聞き取りを行うことができた。聞き取りができたのは、フオニ変種（Kifuoni）、コジャニ変種（Kikojani）、チュヴレ変種（Kichwale）である。フオニ変種につい

ては、文法事項聞き取りのために用意した質問票に沿って基礎的な文法事項についても把握することができた。基礎語彙 600 語については、すでにデータを公表している。2024 年 3 月 21、22 日には「国際バントゥワークショップ」において“Report on Descriptive Studies of Viswahili in Unguja and Pemba Islands”と題した発表を行い、イギリス、ドイツ、ベルギーからの参加者を含む多くのバントゥ諸語研究者からの有益なコメントを得ることができた。

研究期間全体としては、コロナ禍により 2 年間も調査地に赴くことができず、新しいデータの収集および過去のデータの検証ができない状況に陥ってしまったため、当初の目標を達成できたとは言い難い。しかしながら、オンラインも含む国際学会等での発表、これまでに収集したデータを用いての論文・研究ノートの執筆を行い、研究内容を深化させることはできた。ザンジバル島とペンバ島のスワヒリ語諸変種の分布図作成までには残念ながら至っていないが、時制表現をはじめとしていくつかの文法事項については地図上でその違いが一見してわかるようにするなど、本研究の成果を公表する方法に工夫を凝らした。これは、バントゥ諸語のマイクロ・バリエーション研究にも資するものになると思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 竹村景子	４．巻 55
２．論文標題 「アフリカ文学」と言語問題―スワヒリ語作家サイド・アフメド・モハメドSaid Ahmed Mohamedを中心に―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 適塾	６．最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Keiko Takemura & Francis B. Nyamnjoh	４．巻 0
２．論文標題 Introduction - Dynamism in African Languages and Literature: Towards conceptualisation of African potentials	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Dynamisn in African Languages and Literature: Towards conceptualisation of African potentials	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Keiko Takemura	４．巻 0
２．論文標題 Swahili from the perspectives of 'Language' and 'Literature'	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Dynamisn in African Languages and Literature: Towards conceptualisation of African potentials	６．最初と最後の頁 169-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 MIYAZAKI Kumiko & TAKEMURA Keiko	４．巻 26
２．論文標題 Dialectal Variation in Swahili - Based on the Data Collected in Zanzibar	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Swahili Forum	６．最初と最後の頁 45-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹村景子	4．巻 31
2．論文標題 スワヒリ語諸変種記述調査報告（3）ートゥンバトゥーゴマニ変種基礎語彙600語ー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 スワヒリ＆アフリカ研究	6．最初と最後の頁 35-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹村景子	4．巻 35
2．論文標題 スワヒリ語諸変種記述調査報告（4）ーフオニ変種・チュゥレ変種・コジャニ変種基礎語彙600語	5．発行年 2024年
3．雑誌名 スワヒリ＆アフリカ研究	6．最初と最後の頁 230-250
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Miyazaki Kumiko & Takemura Keiko
2．発表標題 On the grammatical variation in 'Viswahili' in Zanzibar
3．学会等名 The 8th International Conference on Bantu Languages（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 竹村景子・宮﨑久美子
2．発表標題 ザンジバルのスワヒリ語諸変種に見られるマイクロバリエーション
3．学会等名 日本アフリカ学会第57回学術大会
4．発表年 2020年

１．発表者名 TAKEMURA Keiko & MIYAZAKI Kumiko
２．発表標題 Report on Descriptive Studies of Viswahili in Unguja and Pemba Islands
３．学会等名 International workshop on Bantu linguistics and Swahili studies: Dialogues in Swahili and Bantu linguistics（国際学会）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計2件

１．著者名 阪本公美子・杉山祐子・坂井真紀子著，竹村景子スワヒリ語訳	４．発行年 2021年
２．出版社 三恵社	５．総ページ数 32
３．書名 ニョタのふしぎな音楽～タンザニアの星空のもとで～	

１．著者名 Keiko Takemura & Francis B. Nyamnjoh (eds.)	４．発行年 2021年
２．出版社 Langaa Research & Publishing Common Initiative Group	５．総ページ数 326
３．書名 Dynamisn in African Languages and Literature: Towards conceptualisation of African potentials	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	宮﨑　久美子 (MIYAZAKI Kumiko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
International workshop on Bantu linguistics and Swahili studies: Dialogues in Swahili and Bantu linguistics	2024年～2024年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関